

### 石橋湛山と政治資金の関係についての予備的 検討

SUZUMURA, Yusuke / 鈴木, 裕輔

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

96

(発行年 / Year)

2024-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030873>

# 石橋湛山と政治資金の関係についての予備的検討

鈴木 裕輔

## 1 はじめに

「地盤」「看板」「鞆」の「三ばん」という表現がそれぞれ支持基盤と知名度、そして政治資金を指し、いずれも政治家にとって不可欠であるということは、周知のとおりである。

もとより、政治家にとって理念や理想が不可欠であることは論を俟たない。それとともに、現実の政治においてはいかに崇高な理念や理想を抱くとしても、それらをただちに実現することは出来ない。そして、実際の政治の場で金銭を用いて自らの勢力を扶植し、素志を実現する光景は決して珍しくない。何より、日々の政治活動を行うためにも相応の金銭が必要となるのだから、政治と金銭との間に不可分の関係が存するとしても不思議ではない。例えば、金権政治を批判し、「クリーン三木」の異名で知られ、政界の廓清を期待されて1974（昭和49）年12月9日から1976（昭和51）年9月15日まで政権を担当した三木武夫が、政治資金の工面に頭を悩ませている姿<sup>1)</sup>は、政治活動の基礎の一つに金銭があることを示している。

ところで、戦後の日本において内閣総理大臣を務めた人物の中で、三木と同様に一般的に金銭の問題とは関係が薄いと考えられている政治家の一人が、石橋湛山である。

石橋は、戦前は経済専門誌『東洋経済新報』を中心に議会政治の推進や国際協調主義の維持、あるいは対外的領土拡張主義の否定を行い、戦後は政界に進出し、1956（昭和31）年12月23日から1957（昭和32）年2月23日まで首相を務めた人物である。

1946（昭和21）年に行われた第22回衆議院議員総選挙で初めて国政選挙に臨んだ石橋が「三ばん」のいずれをも欠いていたために落選したものの、翌年の総選挙では名取栄一という有力な支援者を得たことで当選を果たす。そして、これ以降その死に至るまで、名取は私財を投じてまで石橋を支援し続けている<sup>2)</sup>。

しかし、現在の石橋湛山研究において、石橋と政治資金の関係について十分な研究がなされていないのは、例えば石橋の重要な資金源であった名取栄一を石橋陣営の「選挙事務長」<sup>3)</sup>としたり「総元締め」<sup>4)</sup>として扱ったりしていることが示すとおりである。

そこで、今回われわれは石橋湛山と政治資金の関係を明らかにするための予備的な検討を加えることにする。

## 2 1956年の自由民主党総裁選挙

石橋湛山と政治資金の関係を考える際に最も注目されるのが、1956年12月14日に行われた自由民主党（以下、自民党）の総裁選挙であろう。石橋、岸信介、石井光次郎の3人が争った総裁選挙では、岸派が1億5000万円から2億円、石橋派の中心であった石田博英が7000万円から8000万円を、石井派は石橋派よりもかなり少ない金額を投じたとも<sup>5)</sup>、岸派が3億円、石橋派が1億5000万円、石井派が8000万円を使ったとも<sup>6)</sup>されている。

当時は自民党の幹事長であり、戦前は経済官僚であった岸は、植村甲午郎ら財界人の金銭的な支援を受けて選挙資金を集めていたと考えられる。また、石橋の場合は東洋経済新報社会長の宮川三郎が財政面を所管したとされるものの<sup>7)</sup>、大口の資金調達には三木武夫が大きな役割を果たし、石井派の池田勇人から三木に資金の提供があったことが示唆されている<sup>8)</sup>。

具体的には、宮川が東洋経済新報社の全国組織である経済倶楽部の会員を対象とする小口の献金を募り<sup>9)</sup>、政治家になる前は大蔵省で事務次官まで務め、財界とのかかわりが深かった池田が窓口となって資金を集め、石橋湛山を支援していた三木が石橋派を代表する形で受け取ったものと推察される<sup>10)</sup>。

ただし、当事者の理解は、1956年の総裁選挙に対する通説とは異なる。岸は「後の総裁選挙のようにカネはかかっていませんよ」<sup>11)</sup>と指摘し、石橋も、選挙資金としては堤康次郎の1000万円、松永安左エ門と鮎川義介の500万円などが大口であり、東洋経済新報社が全国に設立した経済倶楽部の会員からの小口の献金が多かったと回想し<sup>12)</sup>、石井も「運動費などは、まるで使わなかった」<sup>13)</sup>とする。

これに加えて、関係者も同様の認識を示す。例えば石橋を支持した井出一太郎は、「私の知っている範囲で」と前置きしつつ、「そう大きな黄白が動いたとは思われない。後々の総裁選挙に比べれば、まだこの選挙は、欠陥はそれほど大きなものではなかった」<sup>14)</sup>と指摘する。「そう大きな黄白が動いた」とは巨額の金銭のやり取りがあったことを指すから、井出は、「そう大きな黄白が動いたとは思われない」とすることで、金権的な総裁選ではなかったと述べていることになる。

1956年の総裁選挙における金銭の問題については、一面においてその後の総裁選挙で用いられた金銭の額に比べて少額と感じられたことを推察させるとともに、石橋、岸、石井ら候補者が自ら集金活動を行ったのではなく、自派の議員たちが資金集めの実務を担ったことも、集められた金銭の総額の把握を難しくしたものと考えられる。さらに、自伝や回想録の類が避けられない、自己の行動の正当化という側面も考慮する必要がある。

いずれにせよ、当事者たちの思惑のいかんにかかわらず、正確な金額が不明であるという事実そのものが、多くの金銭が授受され、資金の流れの全体像を把握しにくくしていることを物語る。

### 3 改進黨総裁問題と石橋湛山

さて、総選挙当選後の石橋湛山と政治資金の問題を考える際に興味深い手掛かりを与えるのが、改進黨の総裁問題である。

改進黨は国民民主党、農民協同党、新政クラブが合同して発足した保守政党である。1952(昭和27)年2月8日の結成大会では総裁は空席とし、6月13日の臨時党大会で元外務大臣の重光葵が総裁となった<sup>15)</sup>。

当時日本自由党に所属していた石橋湛山は改進黨の結成には直接かかわってはいない。しかし、約4か月にわたって空席となった改進黨総裁の座を巡り、石橋は改進黨と具体的な関係を持つことになる。すなわち、「金のことには自分の方で心配してやろうと熱心になっている有力者」により、石橋を改進黨の総裁に擁立しようとする動きがあったのである<sup>16)</sup>。

同じ保守政党とはいえ、日本自由党に所属していた石橋が改進黨の総裁になることは鳩山と対立することに他ならない。そのため、鳩山の反対もあって石橋の改進黨総裁就任の話は立ち消えとなった<sup>17)</sup>。

この話が興味深いのは、改進黨総裁に石橋を擁立しようという動きを知っていたのが、鳩山の他に三木武吉や河合良成ら日本自由党の一部の首脳のみであったとされる点である<sup>18)</sup>。石橋の指摘は、「石橋総裁案」が改進黨の総裁争いの中で起きた駆け引きの一環であったことを示唆するとともに、実際には根拠のない話であったため、限られた者たちしか関与していなかった可能性を窺わせる。

しかし、改進黨の発足時から幹事長を務めた三木武夫は1981（昭和56）年に総裁問題を回想した際、次のように述べている<sup>19)</sup>。

大麻唯男〔元衆議院議員、元国務大臣〕はすごい男だと思ったよ。大麻が重光〔葵、元衆議院議員〕立ち合いのもとに伊藤斗福〔元保全経済会理事長〕より3000万円受け取り、街の金融を法制化することを約束していたんだよ。

重光は金の作れない〔改進黨〕総裁で、僕が幹事長をしていたので、秀花〔築地にあった料亭〕で大麻から、「実は伊藤から3000万円受け取った。俺を活かすも殺すも三木君に任せろ」といわれて困った。その3000万円をみな<sup>ママ</sup>の公認料として出した。

三木の回想に登場する伊藤斗福は戦後の日本を代表する金融詐欺事件で、高配当を掲げて資金を集めたものの1953（昭和28）年に破綻した保全経済会事件の中心人物である。保全経済会事件を契機として元本を保証して不特定多数から資金を集める、あるいは出資を受けることを禁じる「出資の受入、

預り金及び金利等の取締等に関する法律」(旧出資法)が制定された<sup>20)</sup>。

だが、三木の回想にあるように、1950年代初頭の伊藤は「経済の民主化」を標榜しいわゆる街金融の合法化を目指しており、政財界の有力者への資金提供を積極的に行っていた<sup>21)</sup>。例えば、伊藤は児玉誉士夫を仲介役として、鳩山一郎、三木武吉、池田勇人、佐藤栄作などの自由党の要人たちや改進黨の大塚唯男、駒井重次への献金を行っている<sup>22)</sup>。また、伊藤は新聞やラジオなどにも積極的に宣伝を出稿するとともに、読売新聞社の正力松太郎が日本テレビ放送網を設立する際も、株式の10%に相当する1億円を献金した<sup>23)</sup>、あるいは伊藤が献金した2億円が同社の資本金の原資になっているとされる<sup>24)</sup>。

ここで、石橋湛山の日記を確認すると、1952年11月22日の午後7時過ぎに港区赤坂の料亭・瓢亭で初めて児玉誉士夫及び伊藤斗福と面会し、三木武吉と河合良成が同席していたことが記されている<sup>25)</sup>。

すでに改進黨の総裁には重光葵が選出されていたとはいえ、一方に石橋の改進黨総裁擁立問題を知る三木と河合がおり、他方に改進黨に献金していた伊藤や仲介者である児玉がいたことは、この時の会が伊藤側による石橋への接触の試みであること、さらに「金のことは自分の方で心配してやろうと熱心になっている有力者」が伊藤であった可能性を推察される。これに加えて、政界工作に熱心であった伊藤や後に政界の黒幕とも称された児玉の来訪を受けたということは、石橋に一定の利用価値があると認められたことも窺わせる。

#### 4 保全経済会問題と石橋湛山

たとえ実体のない話であったとしても、石橋のために金策の労を取るという「有力者」がいるとされた点は、政治資金の面から考えると興味深い。何故なら、少なくとも1952年の段階で、石橋は一党の党首となるための資金を提供するに値する人物とみなされていたことを示唆するからである。

一方、吉田茂の率いる自由党を離党し、鳩山一郎を党首とした分党派自由党、通称鳩山自由党と伊藤斗福の関係においては、石橋が重要な役割を果た

したとされる。

すなわち、1954（昭和29）年2月1日に行われた第4回衆議院行政監察特別委員会において、保全経済会事件に同会の顧問として関与した平野力三に対する証人喚問が行われた際、日本社会党（社会党）の中村高一との間で以下のようなやり取りがなされている<sup>26)</sup>。

○中村（高）委員 どうも各党にわたりましてまことに恐縮であります  
が、事実をはつきりしておく方がいいので、次は鳩山自由党に関してお  
尋ねいたします。鳩山派の方はだれが交渉に当りましたかわかりません  
が、石橋湛山氏の手形で、鳩山三木の裏書きで一千万円を貸してくれな  
いか、そういう申出をいたしたところが、これはただ金を貸すわけには  
参らぬということになつて、結局のところ、立法化運動についてもし骨  
を折つてくれるならば金を出してもいいという交渉に入つたけれども、  
どういう理由か存じませんが、鳩山自由党には一度は不調になつたんだ、  
そういうことをお聞きになつておりますか。

○平野証人 ただいま中村君指摘のような話も、話ですから、言葉の使  
い方その他については、私もお問いも正確を欠くと思いますが、ほぼそ  
ういうような意味の話を伊藤君がいたしました。

中村の質問の趣旨は次の通りである。石橋湛山が振り出し、鳩山一郎と三  
木武吉が裏書きする手形によって1000万円の貸与を伊藤斗福に申し出たと  
ころ、無条件で1000万円を貸すことは出来ないので、かねてからの主張で  
あるいわゆる街金融の合法化のための立法措置に取り組むなら工面するとい  
う回答があり、その後両者が交渉したものの最終的に1000万円の貸与の件  
は立ち消えになった。このような中村の質問に対し、平野は1952（昭和27）  
年9月の出来事であったとして、大筋で話の内容を認めている。

石橋が窓口となって伊藤との間で交渉がなされた1000万円については、  
平野が召喚された4日後の2月5日に行われた第5回衆議院予算委員会にお  
いても、社会党の今澄勇が取り上げている<sup>27)</sup>。

○今泉委員（前略）まず第一番に、保全経済会の献金については、本人は何ら関係もないけれども、取次いだだけの人もありましようし、いささか精神状態に異常の認められる伊藤斗福の言も常に動揺するでしょう。平野氏の証言必ずしも全部が正しいとも私は思いません。ただ私が政府の皆さん方に申し上げたいのは、まず献金なら献金ということになると、良心的な政治家、検察陣の良心は、あるいは捜査の確實——おのおの日本政界の将来に対して真心から、中にはみずからその事実を打明けたいと思つておられる方もおられるでありましよう。あえて私は、ここで名前をあげては失礼であるが、たとえば二十七年十月の選挙の前に、石橋湛山、三木武吉の両氏に、井上秘書課長が書き残して行きましたメモによると、おのおの一千万円ずつの献金を渡したということになっておりますが、そういうことでは問題になるから、石橋湛山氏の東洋経済、これに年間五百万円の割合で広告を載せるということで、広告料ということにとろうとしたが、三浦鉄太郎という東洋経済のがんこなおやじから、そういうことはまかりならぬということだけでばされて、そうしてこれが直接献金をしたのであるが、この人たちに行つたのではなくて、またそれから、そのほかのところに行つておるのである。それをばらすと自分の身辺も危いというので——井上秘書課長がさような言葉を残して行つた事実もあるのである。私はここでその井上秘書課長が書き残して行つたというこれらのメモについては、その一部はすでに身体検査を通じて検察庁の検事の手元に証拠として入つておるものと思うから、この際これを申し上げて、これが事実であるかどうか、その筆跡鑑定その他のものをやられるならば、この問題は明らかになると思います。そのメモによると、自由党に対しては人を介して三千万円、広川弘禅個人については一千万円、増田甲子七氏については百万円、丹羽喬四郎氏については百万円。なお改進黨は、駒井重次氏については百万円、三木、石橋氏については先ほど申した通りに相なつております。なお、記載せられておつても、真偽はまだ明らかならざるものとわれわれが認定するものについては発表を差控えておきます。なお伊藤個人が検察庁にあげられて、その家宅捜索その他身体検査のときに、五千万円程度の個人のい

わゆる心覚えのメモもあがっておるのではないかと私どもは思うのである。ただ、この問題でテロも動き、あるいはここで質問をした私に対しても、非難あればいろいろありましょう。私はあえて一切のものに甘んじて、少くとも国会の権威のためにこれらの問題を明らかにしていただくとともに、検察陣営の動きいかんによつては、私どもはなおその他の物的証拠を固めて、われわれの方から、ひとつ告訴をいたしたい、かように考えておるのであります。

ここで問題となるのが、1952年10月1日に行われた第25回総選挙である。1947年の組閣直前に公職追放となった鳩山や同じく公職追放の処分を受けた石橋は、1951（昭和26）年の追放解除によって政界に復帰する。その際、自由党鳩山派の幹部となった石橋が、総選挙で自派の議員の当選と勢力の拡大を目指した鳩山の意を体して三木武吉とともに伊藤から献金を受けたというのである。

## 5 選挙資金の調達役としての石橋湛山

第1次吉田茂内閣の際、石橋湛山は日本自由党の選挙対策委員長を務めていた。選挙対策委員長としての石橋は、一般的には総裁もしくは幹事長が行う選挙資金の調達や配布を担当していた。当時は「実力万能時代」であり、日本自由党総裁の吉田茂も幹事長の大野伴陸も、いずれも資金調達の能力に欠けていた。そのため、『東洋経済新報』を通して財界とのかかわりが深かった石橋が、選挙資金に関する実務も担っていたと考えられる<sup>28)</sup>。

しかも、分党派自由党時代も石橋が政治資金の調達を担当していた。また、石橋を裏面から支えていたのが宮川三郎であり、宮川は雑司が谷の自宅を抵当に入れ、退職金を前借りするほどの「窮状」であり、資金的な欠乏が一度は「反吉田」を掲げて自由党から離脱したはずの石橋の復党に繋がることになる<sup>29)</sup>。このような状況を考えれば、分党派自由党を維持するためにも伊藤のような、戦後の混乱期に台頭した、新興ながら資金力のある人物からの献金を受け入れようとしたとしても不思議ではないだろう。

だが、実際には石橋湛山の前任の東洋経済新報社主幹で、石橋の蔵相就任に伴って会長に就任し、1952年当時は同社の相談役であった三浦鏡太郎の強硬な反対によって、『東洋経済新報』に保全経済会の広告を掲載し、その広告料と相殺する形で分党派自由党に献金をするという伊藤斗福の提案は見送られることになる。

保全経済会は1953年3月5日にソ連の最高指導者ヨシフ・スターリンの死とそれによる日経平均株価の大幅な下落がもたらしたスターリン暴落と、この年の風水害の続発による解約の続発を受けて経営が行き詰まり、10月23日に破産する<sup>30)</sup>。1954年1月26日には伊藤が詐欺容疑で逮捕され、国会での証人喚問へと至ったことを考えれば、伊藤から分党派自由党への献金の相談を受けたものの、三浦の反対によって交渉が中止されたことは、分党派自由党だけでなく石橋湛山自身を醜聞に巻き込まれることから救う結果となった。

もし分党派自由党を代表して伊藤と交渉した石橋を三浦という「がんこなおやじ」が押しとどめなければ、保全経済会事件とともに社会の注目を集めていた造船疑獄と合わせて三木武吉から「スキャンダル事件にて内閣は倒る、やも知れず」と伝えられた石橋は、日記に「スキャンダル事件にて内閣が倒れるは明治以来の常例なれども困つたものなり」（1954年2月1日条）<sup>31)</sup>と書き留めることはできなかつただろう。

## 6 おわりに

今回、われわれは政治資金に着目し、石橋湛山が政治資金とどのようなかわりを持ったかを検討した。

その結果、改進黨の総裁選出問題や保全経済会事件など、1950年代前半の日本の政界もしくは社会で大きな関心を集めた出来事で石橋の名前が取りざたされたことが確認できた。特に保全経済会事件では、日本自由党で選挙対策委員長として選挙資金の調達を担当し、分党派自由党でも政治資金の工面を行っていた。これらは、石橋が『東洋経済新報』を通して財界とのかわりが深かったことに由来すると考えられる。

上記のような政治資金や選挙資金との関係は、ある意味で理想主義者としての石橋湛山が挫折した過程でもあり、政治における金銭という物理的な存在の持つ具体的な力を体得するものでもあった。その意味で、石橋湛山にとって、一連の出来事は「政治家としての成熟のプロセス」<sup>32)</sup>とみなせる。

今後は、こうした知見を踏まえ、政治資金に対する石橋のかかわり方を考える上で重要な財界との関係について、稿を改めて検討を加えて行きたい。

## 註

- 1) 三木武夫が企業からの献金の状況に絶えず注意を払っている様子については、次の文献を参照せよ。岩野美代治（竹内桂編）『三木武夫秘書備忘録』吉田書店、2020年。
- 2) 鈴木裕輔『政治家 石橋湛山』中央公論新社、2023年、30-33頁。
- 3) 浅川保『偉大な言論人 石橋湛山』山梨日日新聞社、2008年、87頁。
- 4) 増田弘『石橋湛山』ミネルヴァ書房、2017年、260頁。
- 5) 中島政希「石橋政権と石橋派」『自由思想』第73号、1995年、44頁。
- 6) 御厨監修『渡邊恒雄回顧録』中央公論新社、2007年、167頁。
- 7) 増田、前掲書、289頁。
- 8) 岩野美代治（竹内桂編）『三木武夫秘書備忘録』吉田書店、2020年、685頁。
- 9) 筒井清忠『石橋湛山』中央公論社、1986年、361-365頁。
- 10) 鈴木、前掲書、98-99頁。
- 11) 原彬久編『岸信介証言録』毎日新聞社、2003年、102頁。
- 12) 増田、前掲書、288-289頁。
- 13) 石井光次郎『回想八十八年』カルチャー出版社、1976年、406頁。
- 14) 井出一太郎『井出一太郎回顧録』吉田書店、2018年、155頁。
- 15) 「重光総裁第一声」『読売新聞』1952年6月13日夕刊1面。
- 16) 石橋湛山『湛山座談』岩波書店、1994年、157頁。
- 17) 同、157-158頁。
- 18) 同、158頁。
- 19) 岩野、前掲書、85頁。
- 20) 佐久間修「出資法における経済犯罪」『名古屋学院大学論集』社会科学篇、第57巻第2号、2020年、25頁。
- 21) 伊藤斗福『私はこう考える』コスモポリタン社、1953年、250-251頁。
- 22) 『第十九回国会衆議院行政監察特別委員会会議録』第4号、衆議院、1954年、34頁。
- 23) 遠藤美佐雄『大人になれない事件記者』森脇文庫、1959年、18-27頁。
- 24) 児玉誉士夫『生ぐさ太公望』廣濟堂出版、1976年、68頁。
- 25) 石橋湛一、伊藤隆編『石橋湛山日記』下巻、みすず書房、2000年、543頁。
- 26) 『第十九回国会衆議院行政監察特別委員会会議録』第4号、衆議院、1954年、38頁。
- 27) 『第十九回国会衆議院予算委員会』第5号、衆議院、1954年、21頁。
- 28) 宮崎吉政「新聞記者が接した政治家石橋湛山の実像」『石橋湛山研究』第3号、2020年、173頁。
- 29) 筒井、前掲書、252-254頁。
- 30) 小嶋康生「戦後産業循環と企業倒産」『季刊経済研究』第25巻第4号、2003年、169頁。

- 31) 石橋、伊藤編、前掲書、642 頁。
- 32) 筒井、前掲書、254 頁。

<ABSTRACT>

## **Preliminary Examination of the Relationships between Ishibashi Tanzan and Political Funds**

SUZUMURA Yusuke

Political funds are an essential element in statesperson's daily activities, and no matter how honest they may be, they cannot escape from the problem of money for political activities. The 55<sup>th</sup> Prime Minister of Japan Ishibashi Tanzan (石橋湛山, 1884-1973), who was recognised as person of being indifferent to money, has been the subject of controversy over political funding issues in the late 1940s to the mid-1950s. In this paper, we examined political funds issues of Ishibashi Tanzan focusing on some political and social events such as the Hozen Keizaikai Issues. As the results, we cleared that Ishibashi took a role of the person in charge of political fundraising of the Japan Liberal Party and the Liberal Party–Hatoyama. The relationships with political funds were a process in which Ishibashi Tanzan, as an idealist, was frustrated and it was also a process in which he learned a physical power of money in politics. In this meaning, it was implied that the events related to political funds might be understood as the process of maturation as a statesperson for Ishibashi Tanzan.